

新しく発生したピーマン炭疽病

日本で初めて発生



2009年頃より、養父市内(右上地図の緑色)のピーマンほ圃場で、果実表面が円～楕円形に陥没し、灰褐色、後に同心円状の菌そうに覆われ、オレンジ色の分生子塊が形成される症状が発生した。また、果梗が褐変し、葉に斑点病に似た症状も発生した。2010年には豊岡市但東町(同地図赤色)にも発生が拡大し、調査の結果、コレトリカムシモンドシによる新しいピーマン炭疽病であることが判明した。同年香美町(同地図青色)ではコレトリカムグロエオスポリオイデスによる従来の炭疽病も発生した。

病気の正体



病原菌コレトリカムシモンドシ
の分生子



病原菌コレトリカムシモンドシ
の付着器

他作物への病原性



写真 左: トマトに対する病原性は非常に強い 中: アズキに対する病原性がある
右: イチゴに対する病原性もある

今後の方針

本病原菌はピーマンが風雨で傷つくと、そこから侵入しやすいため、防風対策、的確な予防散布、適正な輪作等を進めていく。